

## 選択理論と アクティブラーニング

聴いたことは忘れるが、見たことは一定期間記憶され、やったことは忘れない。

「エドガー・デールの法則」を要約すれば、こうした表現になるでしょうか。学習者の能動的な学習参加を取り入れた教授・学習法の総称であるアクティブラーニングは、まさしくこの法則に基づいた効果的な学習方法と言うことができます。

確かに、教員による一方向的な講義形式の授業とは異なり、アクティブラーニングによる授業は、子どもたち一人一人の脳を活性化 (activation) します。Activeには活発な、積極的な、自発的などという意味があります。したがってアクティブラーニングによる授業を行えば、子どもたちはより活発に、積極的に学習参加し、自発性、主体性も育つのです。

では、なぜアクティブラーニングにはそうした効果が見込めるのでしょうか。また、そもそもアクティブラーニングはそれを行うこと自体が「目的」なのでしょうか、それとも、ある目的を達成するための「手段」なのでしょうか。

さて、本書を手にとられた方は「選択理論？でアクティブラーニング？」といぶかしく思われたのではないのでしょうか。

ウイリアム・グラッサーが提唱した選択理論は、アメリカでは広く教育界で取り上げられ、これまでに選択理論を学校経営の根幹に据えたクオリティ・スクールが数多く誕生しています。

「教えるということは、子どもに、あるいは子どものために何かをすることではない。教えるということは子どもが学び

たい、勉強したいと欲するようなやり方で全体的アプローチを構築していくことにほかならない」とグラッサーは考えます。この考え方に基づいて、クオリティ・スクールでは、いくつもの大切にしている原則があり、そこには「詰め込み授業は存在しない」「協同学習が通常の指導方法である」と掲げられています。

グラッサーが、「子どもが学びたい、勉強したいと欲するようなやり方」にこだわったのは、本書でも触れている、人が有する「基本的欲求」に強く関連します。すなわち、子どもたちは、勉強がわかれば力の欲求が充足し、勉強が楽しくなります。楽しみの欲求が満たされれば、クラスメート同士の所属の欲求も満たされ、学校生活が充実します。そして、学習意欲は自由な発想や意見交換が保障された、アクティブラーニングによる授業によって高まるのです。このように、アクティブラーニングの目的は、子どもたちの基本的欲求を満たすことに重きを置く、選択理論の考え方と見事に符合するのです。

「互いに協力する技能は、持って生まれるわけではなく、学ぶものである。競争から協同へ」と説いた、協同学習の先駆的リーダー、デイビット・ジョンソンも、児童や10代の若者の教育にかかわる者にとって、グラッサーの選択理論は非常に革新的なものだ、と述べています。

グラッサー自身も、「協同学習の方策は、学習成果を強化すると同時に、子ども同士の関係をも強化する意味で非常に有効」と記しています。子どもたちの基本的欲求充足や人間関係づくりを追求した、本書『選択理論でアクティブラーニング』のねらいがここにあります。